

詩集

星とあやとり

保坂登志子著 内山 懋・絵



著者 保坂登志子（ほさか としこ）

1937年 東京に生まれる。1944年～1950年まで神奈川県松田に過ごす。国学院大学卒業。東京都北区立滝野川中学校・赤羽中学校講師。豊島岡女子学園高等学校(国語)教諭。和洋女子大附属国府台高等学校講師を経て現在に至る。

著書に詩集『花の木の下で』新詩人社(1982年)。詩誌『新詩人』『壺』『玄』同人。

画家 内山 懋（うちやま つとむ）

1940年 東京に生まれる。1965年東京芸大油画科卒業。1967年東京芸大大学院修了。1967年～1969年仏政府給費生としてパリ国立美術学校で学ぶ。1973年ルッカ国際美術展銀賞。

1973年～グループ40展結成。個展8回、その他発表多数。現在無所属。朝日カルチャーセンター講師。

創作文学シリーズ詩歌

*

詩集・星とあやとり©1986

昭和61年10月10日・初版発行

著者・保坂登志子

印刷所・株式会社方英社

製本所・カノマタ製本

発行者・門馬正毅

発行所・かど創房

埼玉県越谷市大成町8-2520-44 ☎343

☎0489-86-8800 振替東京6-32461

N D C 911 / ©1986 / 84p / 23 × 16cm

ISBN4-87598-022-1 C8092

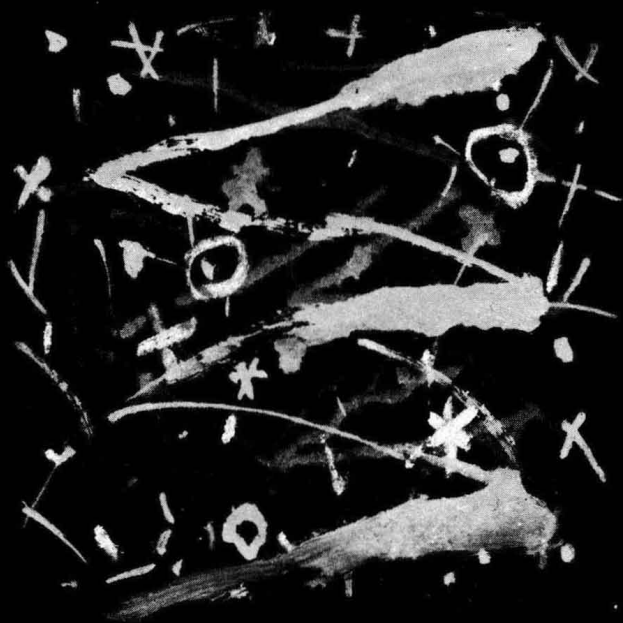
<検印省略> 乱丁・落丁本はおとりかえします。
定価はカバーまたはオビに表示してあります。

詩集 星とあやとり

保坂登志子著 / 内山 懋・絵



も
く
じ



									I
								8	星とあやとり
								12	星の落し物
							14	うらら	
						16	花嫁さんのように		
					18	ひみつ			
				20	芥子の花咲く時				
				22	つぼみ				
		II							
	26	雲							
28	春は気まま								
32	やさしく春は								

62	58	54	50	48	Ⅲ	44	42	40	38	36	34
狼 おおかみ の牙 きば よりも	ほどく	少年 しょうねん は今 いま	冬 ふゆ もどり	揺 ゆ れる		ヒビビ―ビ	木 こ 枯 がら し散 さん 歩 ぽ	よりみち	夏 げ 至 し	インコが鳴 な いた	蛙 かえる

64

鼓動 こどう

68

信楽の旅 しがらきたび

72

人はそれから ひと

76

牛 うし

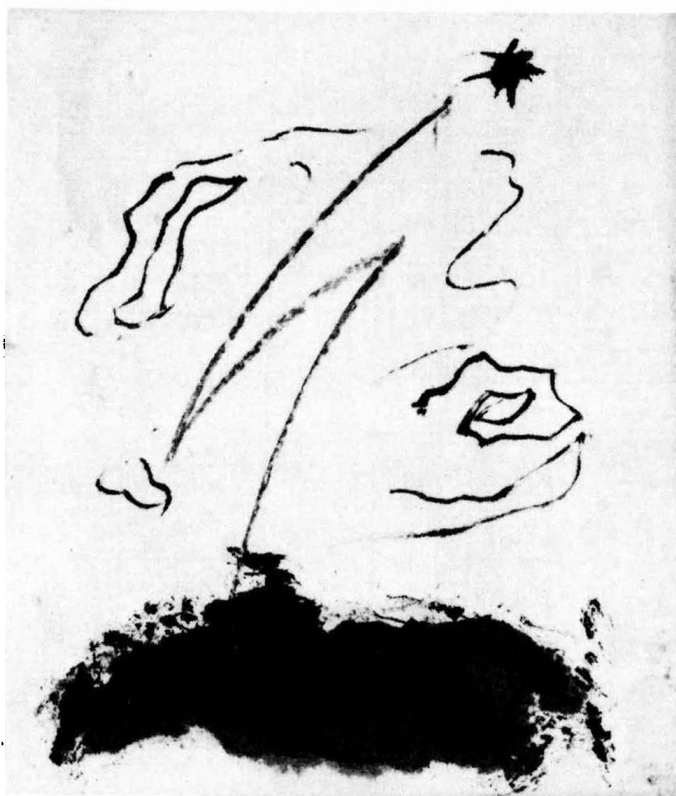
78

雪原に立つ せつげん

80 『星とあやとり』に添えて……山本和夫 ほし

83 あとがき

I



星とあやとり

星^{ほし}とあやとりをしませんか

冬^{ふゆ}の空^{そら}です 北斗^{ほくとせい}星

おおぐま こぐま カシオペア

指^{ゆび}の数^{かず}なら十二^{じゅうに}分^{ぶん}

ふたご おうし座^ざ オリオン座^ざ

星^{ほし}の涙^{なみだ}の銀^{ぎん}の糸^{いと}

星^{ほし}くず紐^{ひも}のあやをとる

星^{ほし}とあやとりをしませんか

空^{そら}いっばいの物語^{ものがたり}

オリンポス山^{さん}の神殿^{しんでん}の

ゼウスの神^{かみ}の悲^{かな}しみと

ヘラの怒^{いか}り空^{そら}を駆^かけ

自慢^{じまん}の過^すぎた神^{かみ}の罰^{ばつ}

悲^{かな}しみ色^{いろ}のあやの糸^{いと}

星^{ほし}とあやとりをしませんか

白鳥^{はくちょう}と化^かし 雄牛^{おうし}と化^かして

角^{つの}ふりたてて戦^{たたか}った

勇者^{ゆうし。}の姿^{すがた}誇^{ほこ}らかに

力^{ちから}自^じ慢^{まん}のその果^はては

こん棒^{ぼう}と矢^やと剣^{けん}を受^うけ

いたみこらえる糸^{いと}をよる

星^{ほし}とあやとりをしませんか

空^{そら}にひろがる物^{ものがたり}語



星の落し物

夜明^{よあ}けの枯野^{かれの}は海^{うみ}でした

星^{ほし}のかけらのちかちかゆれる

かちんかちんの海^{うみ}でした

昨夜^{ゆうべ} 星^{ほし}が

あんまりおしゃべりしすぎたので

こぼしたすてきな落し物^{おとしもの}

落し物^{おとしもの}は 今朝^{けさ}

少女^{しょうじょ}のつま先^{さき}にあたって

きらきら小鳥^{こどり}になりました

落し物は今朝

少年の足音にはじけて

ひんやり風になりました

風は少女の髪をゆすり

小鳥は少年の夢を追いかけて

笑い声の渦になりました

渦は大きくどよめいて

霜の枯野は

空へ空へ

流れる川になりました

うらら

昨日^{きのう}は大雪^{おおゆき}

今日^{きょう}地上^{ちじょう}には

さまざまのオブジェ^{オブジェ}の華^{はな}やぎ

洗^{あら}いたての空^{そら}にわたしは

舵^{かじ}を^も持たない舟^{ふね}

胸^{むね}にはおしやれな羽衣^{はごろも}をつけ

光^{ひかり}と風^{かぜ}のつまびく音^{おと}の波^{なみ}にのって

ま新しい色彩^{あたら しきさい}とたわむれる

やがて雛^{ひな}たちに休息^{きゅうそく}の時^{とき}を知らせる

親鳥^{おやどり}のかたちで

空^{そら}はゆっくりパレットを閉^とざす